



# 「外国のねっさんは やはり外国の言葉を しゃべるのだろうか」

「なぜ人を殺してはいけないのですか」青少年を集めたデイビッド番組で、或る少年が発した質問である。場は凍りつき、教育者も評論家も的を射た解答をすることができなかったそうだ。

私ならこう答える。「ダメだからダメなのだ。」と。こんな身も蓋もない答えだとしても、理屈抜きで押さなければならぬ場面もある。殺人が許容されれば、報復の連鎖となる。他者を信用できなくなる。社会はあつという間に崩壊する。我々が社会を維持したい限り絶対に殺人は認められないし、人を殺すな、と教育しなければならぬ(もつと情緒的な理由も当然ある)。

先月末に、長崎県佐世保市で起きた事件は、世の中に大きな衝撃を与えている。子どもによる犯行というだけではなく、その凄惨さや動機の不可解さ、さらには、佐世保では十年前にも同様の事件が起きたことも、世間の関心を集めている要因である(加害生徒の異常性ばかりに焦点が当てられているが、亡くなった女生徒とそこへ両親はどれだけ無念なお気持ちであろうか。私たちが接している報道の向こうには被害者遺族の方々がいることも忘れてはいけない)。私も、この事件にショックを受けた。佐世保が、私が生まれ育った土地であるだけではなく、生徒が通っていたのが私の母校だったからだ。地方都市のどかな公立高校である母校と、事件の猟奇性とのギャップがあまりに大きく、その違和感に気持ちの整理がつかないでいる。単なる卒業生に過ぎない私ですらこうなのだから、在校生のストレスは想像を絶するものだろう。

地方の進学校なので、まるで予備校のように夏休みは毎日補習授業がある。どのように気持ち切り替えているのだろうか。母校は旧制中学の流れを汲み、著名な卒業生も多く、数年前に中高一貫校となつてからは、さらに進学校として勢力を増していたと聞く。しかし、今後は、出身校を口にするを一瞬ためらうことを覚悟せねばならない。

母校の卒業生である小説家の村上龍は、凶悪犯罪を主題とした小説のあと書きにこう書いていた。「この作品の途中、あの神戸・須磨区の事件が起きた。そして、連載の終わり近くに、十四歳の少年が容疑者として逮捕された。(中略)想像力と現実がわたしの中で戦った。現実には想像力を侵食しようとしたし、想像力は現実を打ちまかそうとした。そういうことは、二十二年間小説を書いてきて初めてだった」そのような彼ですら今日のような現実には想像しえなかったであろう。

ただ、明言するべきは十年前も今回の事件も大変特殊な事例だということだ(ただし、内容的にはかなり異なる)。また、学校だけで対処できる範疇を超えている。そして、これらの特殊な事例から、一般の生徒へ普遍的な教訓を得ようとするのは難しい。例えば、十年前の事件のうち、「命の教育」なるものを長崎県を挙げて推進していた。やるという意思は間違っていないが、内容は適切だったのだろうか。元々、長崎は「他者の圧倒的な暴力によって命を奪われた人々」について学ばせている県である。原爆についての平和学習だ。小学校低学年から長崎の原爆資料館へ連れて行かれ(子どもは本気で怖がつて泣く)、死者の写真の載った体験記が普通に図書館に置いてある。問答無用に死を見つめさせ、理不尽な暴力について教える—そういう手法に比べて、いわゆる今の「命の教育」は、抽象的で綺麗事で儀式的にしが見えない。



東日本大震災のとき、揺さぶられる電車の車内で、私は死を覚悟した。あの日、震災を経験した人々は、程度の差はあれ、命について考えたはずだ。「このまま死ぬかもしれない」と思った時「もつと生きていたい」と本能的に感じた。神戸の震災の時はそこまで考えなかった。自分が体験して初めてそう思えた。恥ずかしい話だが、自分の想像力などそんなものだ。



これだけ情報が手に入る時代に、死の具体性に一切触れない、建前のようなやり方が子どもを心をつわげがない。そんなこと、現場の教師がいちばん理解しているはずなのに。しかも、母校のような進学校は、常に競争を意識させる。受験に打ち克つことが合言葉だ。道徳的な話をした同じ口から競争に勝つように言われた子どもは、大人を信用しなくなる。

以前、東京の私立高校の国語の入試問題で新聞記事が取り上げられていた。「死んだ者が生き返るか」という荒唐無稽な質問に対して、驚くほどの数の子どもや学生が「生き返る」と答えたことを取り上げ、生とは何かを問う内容であった。そこで養老孟司氏の発言が取り上げられていた。『よくかけがえのない命』というが本当にそう考えている大人がどれほどいるのか。例えば樹齢百年の松の木が一晩で切られてなくなつていった。それを元に戻すのにどれだけの年月が必要か。戻すことができないのに、壊すことには容赦がない。そういう大人の都合を子どもは見抜いているわけですよ。」

NHKで放送されたドラマの中で、老刑事が被疑者を喝破する。「人は生きてる中で殺したいくらい憎いやつに出会うことがある。だが、普通の人は殺さない。殺せない。こいつにも親がいる、こいつにも惚れた男や女がいると思つた瞬間、そいつが人間に見えて、だから、人間は人間を殺さない、そして、殺せない。だが、こいつは違う。こいつは憎くもない人を、弱い人を選んで刺し殺した。なぜそんなことができる

たか、それはこいつが人間じゃないからだ！お前もすっかり踏みとどまって闘え、人間なら！」タイトルは、村上春樹の「海辺のカフカ」からの引用である。言語が思考を規定するとすれば、おそらく、外国語を聞いている猫は、その音声で物体を認識しているはずだ。同様に、環境も人間を規定する。何を見て、何を聞き、何を感し、何をどのように教えられてきたのか。人を殺めるにはカッターナイフ一本で足りる。他人ではなく自分を殺めることもできる。そんな、とてつもなく大きな感情が塊となつて動いたときに、それを押しとどめるのは心に築いた防波堤の高さに他ならない。その高さを決定づけるのが、環境だろう。「お前が人を殺したら俺が絶対に許さない。だから殺すな。」「お前が死んだら、俺が泣く。だから死ぬな。」言葉にしなくとも、そういう気概を持った大人がどれだけ周りにいてあげられるか、それが一つの鍵ではないだろうか。(関)

## ノートと共に

私の本棚の片隅にはよれよれのノートがある。周りの小綺麗な本と比べてみても、多少場違いな感じがする。ノートも時代とともに変化しているようで、最近では方眼ノートが流行りらしいが、そのノートは最近のものではない。それは私が大学受験に失敗し、予備校に通っていた時に使っていたノートである。もう何十年前も前になるのだが、未だに大切に持つてある。それは、今日、私がこうして英語を教える原点になつたものと言つても過言ではない。買ったときには一冊いくつもなくあつたノートだが、今ではお金に変えられない私の宝である。

これまで一体何冊ノートを使つてきただろう。自分の中で節目と思える時には、そこに必ず特別なノートの存在があつた。逆に特別なノートの存在が節目を作つたともい



える。ではいつからそういったノートが存在したのか、そのルーツをたどると中学三年のちょうど今頃にあたる。

中学生の時、私は卓球部に入っていた。このことを話すとよく失笑されるが、大多数の人がイメージするような「暗く」「練習のゆるい」卓球部ではなかった。校内でもその厳しきでは一・二位を争うもので、卓球で飯を食うわけでもないのと、周囲からも声が聞こえてくるような部活だった。

成績の方は、個人戦では常に大会でベスト四。団体戦では、一試合目の選手として活躍。私の勝敗がチームの勝敗をわけた。私はエースだった：と格好良く書きたいところだが、その練習量とはうまく比例せず、実際は個人戦ではいつも三回戦ぐらいで敗退、これといった大きな成績を収めることはなかった。三年の夏の最後の大会においては、華やかなエンディングには程遠く、今まで負けたことのなかった相手に負けてしまう大敗となった。正直な話、それほど熱を入れていなかったが、さすがにその不甲斐なさに悔しくて、文字通りその場に泣き崩れた。



こうしてはかなくも私の卓球部としての活動は終わりを迎えたが、部活ばかりで勉強ができていなかった私を心配してか、部活の顧問の先生が声をかけてくれた。そこで毎日勉強したものを見せることになり、受験まで見てもらうことになった。一日一ページと決して多くはないものだったが、毎日継続してやっているとそれが習慣となり、気がつけば五十枚綴りのそのノートは一冊終了するほどになった。これまで、どのノートひとつとっても使い切ったことがなかっただけに、その達成感は大変なものだった。自分に継続できる力がこれほどまでにあった、ということを知った。その後何かに行き詰ったり自信がなくなったりすると、そのノートを引っ張り出し、折

れそうな自分の心の支えにしていた。「過去にこれだけ自分はやれたから今度もきつとやれる」と。中学三年生たちは、部活が終わり、その余った力を勉強に注ぎ込もうとしている。その勉強の過程で、私がかつて経験したように、その後の自分に影響を与えてくれるノートに巡り合うかもしれない。ノートは、お小遣い程度の代金でそんな素敵な体験をさせてくれる。だから、一つ一つのノートを大切にしたいと思っている。ノートを大切に扱うことは自分の可能性を大切にすること。ノートをいい加減に扱うことは、自分の可能性を自らの手でつぶしてしまっていること。そのように私には思えてならない。(小池)

### 模試とチキンハートと 弱点克服③

●今回で三回目である。チキンハートの人達はその後どうだろうか？相変わらず模試のときに頭が真っ白になり、失敗した科目のことを次の科目へひきずり「またダメだった」とタメ息をついているだろうか？いいんですよ。繰り返しなさい。何回でも繰り返しなさい。そして、本当になんとかしたいと心から思うのであれば、当日のことを振り返り、自分の心の動きをメモしなさい。ノートを作って。

●さて、今日は「解き方」についてである。解き方は本当に大事である。但し、学力がついていなければいくら研究してもダメ。知らないことだから、解ける問題などあるはずがない。

●実は、解き方にも色々な視点がある。順を追って述べよう。

①問題ごとの時間配分を考える。中学生のVもぎ、高校生の模試、それぞれの過去問。種類は様々だが、とにかく問題に向かうとき、時間配分を考える習慣をつけることが必要だ。その練習には、今まで受けた模試と過去問が最適。次の模試まで

に一番何分、二番何分といえるようにしておくこと。こういう準備なしで、当日だけ時間を気にするから、つまり、いつもやっていないことを本番だけでやるからうまくいかないのだ。勿論、決めた時間通りにいかないこともあるから多少の増減は当然。

②何点とりたいかを決めて、そこから何点捨てるかを計算する。例えば模試で、今、50点しかとれない科目があるとすれば、次の目標を90点とかにはしていない。60点か70点がいい所

目標が60点であれば40点捨てられるし、70点なら30点捨ててよいことになる。しばらく考えて、分からない問題があれば「カン」でやって次にいく。とにかく、40点から30点は捨てていいのだから。そうすると、解ける問題にきちんと向かうことができる。それなのに、キミ達は分からない問題にぶつかつたとき、そこで一生懸命がんばって時間をつかい、結局解けなくて落胆し、更に残り時間が少なくなつてあせり、解ける問題もとれずに終わる。なんとかかしたいと思わないかい？思うんだつたら何とかしろ。でないと入試の日まで繰り返しすることになるぞ。

③バカ計算をなおせ。暗算が苦手なのに暗算したり、問題用紙のいろんな所に少しずつ計算してミスしたり。こういうのをバカ計算という。数学が苦手という人に多いのがこのタイプ。答をみると「あ、そうか！惜しかったな！」と悔しがって終わり。また次も繰り返し。毎回10点も20点も失って絶対におおさない。キミには計算力がないんだ。だから模試の日ばかりと計算しろ。それができるには毎日の訓練が大事。だから日々の計算が大事。

④迷う時間と考える時間を区別せよ。いくら考えても時間内に答は出てこないのに、これはAかBのどっちだろうと迷って時間を使う人がいる。本人は一生懸命なのだが、ただ「一生懸命に迷っている」だけなのである。この時間を捨てる。そ

うすれば解ける問題に使う時間が今よりも増える。②で述べたように、30点でも40点でも最初に捨てること決めた点数の範囲内に入れて次の問題に進むのだ。

⑤設問ごとの解き方。これはこの紙面では難しいのでカット。授業をしっかりと聞いてつかんでほしい。

●以上、三回にわたって書いてきたが理解してくれただろうか。真面目に受験を考え、成績を伸ばしたいと思っているなら、しっかりと読んで役立ててほしい。で、もう一度おさらい。

●チキンハートの人が(実はそうでない人も)力を発揮したければポイントは三つある。

①テストのとき、失敗してもかまわない。とにかく、自分がどういう心理状態だったのか思い出してメモを取り続けること。そして、それを何回も読みなおすこと。そうすることで、どうすればいいのか見えてくる。

②学力をつけること。そのためには適切なやり方で、これ以上できないぐらい勉強をすること。これが自信になる。

③テストを受けるとき「受け方」を考えること。これが今回のメインなので、もう一度読んでほしい。

●チキンハートの人は、実はすばらしい可能性をもっている。向上心が強い、繊細である、理想が高い、等々。これは、きちんと訓練すれば、いい方向で能力を発揮できるようになる。めげずにがんばってほしい。夏休みもあと半分は残っている。二学期から飛躍するチャンスだ。充実した毎日を送られんことを祈る。

(小林(健))



#### ▼▲継続希望の方へ▲▼

▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。

▶在籍していた教室までご連絡ください。